814
8
特別

天明令典永鑑

三十七

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』 請求記号 814-8

ガラス使用

天明令典永鑑　二十七

六ノ百廿六　第五棚

国立国会図書館　　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用

178—12
58—ほ

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』 請求記号 814-8

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』 請求記号 814-8

ガラス使用

善諸作事業上下水道おこる

寶暦十一己年十一月

此日有旨

御城内外御櫓多門并
屋敷神尾不出厩火消屋
出入用積出作事方小普請多兵出
吟味下ケ切等向後出入用積之拾分

以上ニ於テハ勘定奉行ヨリ可申渡
御裁可ヲ以テ御目見以下御徒並ニ被仰付候節ハ
勘定奉行ヨリ申渡候仕来書ニ見合延並ノ通
可被仰付候
一 上野増上寺
御霊屋向ヲ外ニ山門ヨリ御徒
一 湯島山王社無役雲社ヨリ被渡
一 猿江ノ代来
一 汁橋ノ辺ヨリ門ノ前
一 御城内外所ノ道造
一 市中普請方小普請方定小屋
一 ノ通リ小屋

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8
ガラス使用

十一月

一来ル廿日発向
一源川内船差
一子歳ヶ谷内漁猟差
一那川東海寺山内ノ漁猟
右之分差免候間可申渡旨ノ奉
ケ所之内入亜国船ニ而
元内勤定奉行ヨリ

寶暦十二年五月

一在城之面々屋敷之外ニ而
山林竹木等ニ至迄新規ニ
石垣土居小築立山類之儀
何事ニ寄新規之儀ニ候ハ
中ノ山

右之通可遵奉之状如件

又月

寶曆十三未年三月

勘定奉行

小普請方定式掛附札
多仍変札被渡方ヶ所
相延候者自然与札入用
可有之候ニ付左之通可

一定式ノ入用ニ付テハ年月懸ヶ渡シ
候儀ニ付テハ小破取繕ヒ
積別合ニ内見ニ及ヒ
ニ茶湯可申渡シ
右月懸ノ入用積
茶湯ニ引落シ
一御本丸以下庭向ノ
御城先ニ定式ノ入用ニ合セ大概
候ニ通ノ警衛見合ニ茶湯可
申渡ノ入用ニ候ヘ
茶湯ニ引落シ
一御泉水ノ向ノ波除杭ノ場不ニ
候ニ通ノ警衛ニ茶湯
可申渡ノ内右ニ通茶湯

振別ニ入用引方可申立ノ旨可被
申付ニ入用ハ御城ノ御指教都而可
元本ノ如ク減金ニ而年々暮上ノ
可有之ニ付テ節ニ引高書付可
差出ノ

一只今ニ不ニ限候得共向後ハ海ノ
古板不定小屋ニ而践引ニ付ノ
向後ニ而ハ古木類ニ定小屋ニ
引高一ニ而ハ用不ニ足古木ハ不ニ
ハ構或ハ取拂ニ而外ニ
ハ構或ハ取拂ニ而外ニ同海ニ
元足リノ分ハ又別段ニ入ニ
金高ニ而別引ニ
渡切ニ仕ノ積ニ
右ニ通ニ
候。

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8
ガラス使用

可致承本仰旨之事
可致承知仰
三月
右之通小普請奉行被仰渡之者

寶暦十三未年九月

勘定奉行
御城内外之外不及出役
但非番方小普請方ハ其組頭
又ハ拾人扶上之内ニ而組頭仕相書之趣ニ

仕候後て指子お礼取之り仕上指
ケ所茂有之仕候ハ過去帳又見合ニ茂越
お礼仕候共又指越不申候ハ而ハ決渡不申候
取之り仕上仕候書ニ指ケ所不出来仕
候ハ而ハ決渡不申候ハ而ハ
候ハ而ハ不宜候ハ而ハ
中吟方お取之茂有之候ハ
家初ニ而指越不申候ハ而ハ
以上ニお成候可有之候ハ
決不仕候後ニ而ハ
不及若取之り仕上指ケ所
手紙仕月分ニ而ハ
指仕場所ニ而ハ
仕候後ニ而ハ
仕月分お後要細可

又指委官并仙波渡上往返書狀
指出ヶ所出来ハヽ仙勘定不届
仙北東方小當宿方ニ
仙日ヶ茂中渡右之
九月

寶暦十三未年十月

仙勘定奉行ニ

仙波
御宮三昔野與仙別當不法仙渡ニ
依ヽ通奉行役人不
仙渡一式宿頭ニ仙

此旨被仰付候間小普請方
可差出候
一此度被仰出候上ニ而是ニて差出
一此旨被仰出候間小普請方可
右之通可申渡候得共先此段
小普請支配江茂申渡候
十月

右之趣被仰出候間小普請
支配江茂
可申渡候

明和三戌年十一月

出勤定吟味役ヨリ

出役申渡之覚

出役事一方小普請一方ヨリ難ニ相成
候ニ付立合未ニ及ハ
出役後ニ用出勤ニ不
及候間ニ御用ニ
無之ニ付勤ニ不
出役ニ御用ニ
無之ニ付勤ニ不
出役ニ御用ニ
無之ニ付勤ニ不
出役

見当り仕招書引合お遠ざ
ざりて者石中達ゆて招て永敦ゆ

十一月

明和五子年十月

仙台家海寺
陸地海おち
松平陸奥守
川井次郎兵衛

水戸津方小普請方旅不
永十同招ニ而直旅招別ニ而
モ上旅方ヤ水入用遠不
ヤ亜ニいたし

平常出入用ニ不苦ニ而
何亜麻ニ引合不申當ニ
一神女遠亜麻帳屏風ニ而高安ニ而
者め不実ニ而亜麻布ニ
一不限亜麻ニ候得ニ
何亜麻ニ不寄引合神ニ
一神ニ而亜麻ニ而成ニ

明和二子年二月

[illegible]
[illegible]

今度日光
御社參就
[illegible]
[illegible]普請[illegible]御渡不[illegible]
可[illegible]相心得[illegible]

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用

十一月

右之通仕丁小普請等行之、渡
仕丁不足得其意仍

仕丁

仕丁勤労吟味役ヲ

明和七寅年二月

仕丁小普請方小普請方ニ而
何茂見分有之ニ付出ル
見分いたし候ニ而ハ無之
支配向ニ而見分致候ニ付

右處置是之見今有
是之通不法相允
二月

昭和七寅年三月

記戸遠國共二出役
而二出役安引後ホ勤
只今迄志手第ヶ一切
出役勤ノ内ヲ怪我仕
ホ手ヲ破損ホ拾金不下

自今已前不中分別外權未出
見普安王下拔下注之天上已及大破
自今已後雖成功
是今上御後不許
不許私得

十一月

右下通云建元卯年十月廿日

故內大破後更不自今已後又出
外下給不成不注事下拔相人沿
小破大破下兵別外
向成者下拔已外
去建元年
十月廿日
自今已後
不許私得

右下通云建元卯年十月廿日

敬啓者去年御通知之件ニ付
下谷中御花畑長屋改築
右図面之通ニ而も
右之趣御心得可被下候
以上
三月

以上
明和八卯年三月
日
御勘定吟味役

御城内外上野増上寺
尾張和泉之儀ハ
御先代様御止宿八寸角
御板木御預御

前代之上分下之七寸角ニ一丸有
て中ノ
但沢中沢沢事ニ一流ノ有段て中ノ
一右拍子ニ成拍迄内ニ或ハ同遠場所ニ
根包ニ不ニ而七寸角ニ
此拍子ニ不ニ而ハ不ニ手斧ニ
お用て中ノ拍貫ニ右ニ唯一て中ノ

右場不ニ成ニ此日ニ勤ニ吟味ニ及ニ
色ニ弾詰ニ一お拍て中ノ右ニ通
相成ノ上ニ大工ニ手挽ニ
お減て中ノ
右ニ通ノ仕事ニ付ノ
ノ習拍ニ手ニ意ニ一ニ色ニ
二月

弘和九庚年三月

此度類焼之面〻家屋迄
無之候分限お直ニ被仰付
旨屋敷之儀ハ追而可申渡
旨ニ候間此旨大名たりとも
いつ〻ニ不寄可申入候

永祚元年
右之通以度類修之而已
二月

昭和九辰年二月

内閣記錄局

松平春嶽

遠列今加南関東被換之
永中改加派之令百九拾三年永令
去渡加百年之方二而入会候後ニ記中ニ有加

右之通松平春之亟ゟ
申越候
　　以上
　六月

明和九辰年六月

大目付
　先達而大坂之者御櫓御門之外
焼失ニ付右之所ゟ出雲講有之旨を
御手続ニ而
　私領拝免有之候ニ付大坂ゟ類焼

有之旦ハ自治ハ用水勧農ニ
ハ人ヲ以テ其ノ村ニ用捨
ハ自治法ニ不抵及ハ入用ニ
ハ村ノ事

右之通可申上之旨ニ付連署
ヲ以テ此段
六月

御和九辰年六月

先年以来之法格別ニ
尾薯喜ハ売薯不揚不
ハ出ハ変年後以来百遠ニ
有之ニ付遠意ハ振合ニ
掛ニ成兼来成ハ成有
ハ招ニ応ス

此度大雨ニ而大災有之候ニ付
江出之通筋有之候者共暫之
手通ニ而も水抜いたし候ニ付
表通ニ而も裏ニ而も御定之
場所ニ有之候ニおゐてハ
同様ニ候ハゝ少々ニ而も向後ハ
おゐてハ其ニ而
小屋掛ニおゐてハ組合切ニ
仕候様ニ御定之通筋ニ而も
右之通ニ而ハ数ニ而ハ
無之候ニ付一統ニ而ハ

安永三年正月

去ル年屋敷類焼ニ而ハ書籍
不残焼失其後長屋ハ不ニ建ニ有ニ
之候ニ付表門ハ百俵長屋ニ
書籍ハ仮ニ土蔵ニ而百俵長屋ニ
書籍ハ仮ニ土蔵ニ而百俵長屋ニ
書籍ハ仮ニ土蔵ニ而

以前可為之改當遣收
下弘改以此通海外之右准
四月
右下通下弘者解以

安永四未年三月

寺社奉行

上鄂中當社御
先達而被損下候見合書
候矣以此當請引續
御使被差相當以前先御免

氏文書添而此書付御中堂へ
渡可申候　追而可申述候
追々ニ申及候共此節ハ
取急候ニ付不申達候
　　以上
　三月

安永二巳年二月

此御定書ハ
追而定式之御渡有之候
迄ニ取扱仕事いたし
候ニ付而ハ
永墨ニ而書物不宜候間
墨用意可有之候
　　以上
　丑十月中ニ

堅仕事ホ相仕
云授十月後ニテ
春ニ至元魁ノ積相
仕招済入用積ニ
不至招前廣ニ元招
先至ノ内納渡ニ
致勘無ニテ訖ホ同ノ

二月
右ニ通内御事奉行小菅治左
中渡ノ旨訖得モ意内
内入用積吟味ニホ
多宮元招ニテ訖相仕

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』 請求記号 814-8
ガラス使用

寛永八乙卯年二月

此書写本行

諸下御領知入用支積被仰付
究知之上積不充無御上
新捨並米中並御
別段出入用相頼候
有之

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8
ガラス使用

九州の七道令
女穢に見合に歟
始て相扎歟於
陣招元穢に為
場不元歟仍上
定返指示
て記仍
二月

右に通市例事
中渡の官人入用
右に穢を以相扎

天明二寅年二月

仙洞御所
小堀清左衛門

三列號ル

御宮被當社奉仙別當
仙基落飾仙基方ニ為法之御穢ニ
仙基出家法体基方ニ為法之御穢ニ

自代斗尭志ノ官右ノ例渡ス為
御用ニ私ノ小普請方ノ御
役尭景仕払通条書来ル候ニ付
テ役自ラ私ノ役ノ事
書ノ写ヲ以テ御ノ官ニ
差出ス候也

天明二寅年三月

御勘定奉行

浅草行所裏通ノ地測量ノ用意ニ
お廉役不向ノ役宅長屋ホ吉田
鞘員ノ尭志ノ御入用積金ニ
多七拾九両ノ内ニ而引請

仕拾通ヲ遠江ニ下ス
相違ノ習ヲ定ムル勅ヲ
五月

天明二寅年六月

此勘定奉行ヨリ

御客向等 御霊屋向ヲ
目論見ヲ以御普請
ヲ命ス其後改ル
迎ニ此場所ニ而

仕拍出入用意被仰付事ニ候
出場不意越之上ヲ仕亜仙蔵ヲ
出場所ニ而差留ル様ニ致度旨
右段々申仕拍通出場ニ而
不相成出場不ヲ仕拍通いたし
差而拍子抜之様ニ相見候場不ヲ
於仕拍被為御無用ニ候事

仕拍出入用意被仰付事ニ候
仕拍通不被仰而ヲ究初ヲ
日論見不申拍ヲ仕拍通
出場所ヲ仕拍通相亜仙蔵
有之拍子抜之様ニ相見候場所
不拘急度ヲ上拍ら相改宜場所
ヲ以ヲ可申ヲ所ヲ敬礼止ヲ

天郎大右二准テ
仕招出入用大相
職ニ依別段ニテ記中吟ノ

六月

右ニ通出納事ヲ行小普請ヲ
中後出目有出勤完
出納後ニ吟味役ニ
納渡ニ合ホ

江月ノ巻ヲ右ニ
中後ノ目ニテ記ヲ

天明二寅年六月

南都定光院名

上野清上寺記錄山

御宮年 御靈屋向西南御後

額面見分中候 御花嚴向

見苦敷相成候ニ付延ニ相成當秋

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8　　ガラス使用

天明二寅年十月

市郡定掛ヨリ

民部ヨリ殿屋敷取向年長屋共及
大破候ニ付手当法、郡代及ヒ支配
所共ヨリ之通
掛合ニ上来ル申ノ年相減

来日一式預入用意令書写九百
又拾枚証印依前二而 給渡
此中有て証文之上お指出候
ハ、其之仁被免候而右令書ニ而
相渡候ハ、早々可罷越候
旨可被達候
十月

天明二寅年十月

此御定書ハ
松平伊豆守

遠州今切関所
給渡手形破損ニ付
弐百九拾壱枚之内
弐百八拾文

九分ニ相渡ル旨ニ而入着
渡ニ而ハ十月中旬ニ
見分為差越ニ而
ハ奉行ニ而ハ
十一月
右之通松平伊豆
ニ而ハ相違ル旨

天明三卯年七月

九月廿日

三州大樹寺
市宮　市靈屋
八月十二日ニ出来
為来賀見分之

天明七年午閏正月

江戸町奉行

此度小普請支配
組之者共不法之儀
有之候ニ付
御目付
御小人目付
江戸市中
江戸近在
江戸十里四方
江戸町中
江戸中
江戸
江戸表
江戸屋敷
江戸詰
江戸定府
江戸住居
江戸出府
江戸参府
江戸発駕
江戸着
江戸立
江戸上り
江戸下り
江戸廻り
江戸廻船
江戸積
江戸登
江戸送
江戸入
江戸出
江戸払
江戸追放
江戸構
江戸屋敷構
江戸屋敷留守居
江戸屋敷詰
江戸屋敷出入
江戸屋敷奉公人
江戸屋敷下男
江戸屋敷下女
江戸屋敷中間
江戸屋敷小者
江戸屋敷足軽
江戸屋敷若党
江戸屋敷用人
江戸屋敷家老
江戸屋敷留守居役
江戸屋敷詰役人
江戸屋敷出入商人
江戸屋敷出入職人
江戸屋敷出入医師
江戸屋敷出入坊主
江戸屋敷出入山伏
江戸屋敷出入神主
江戸屋敷出入社人
江戸屋敷出入寺院
江戸屋敷出入僧侶
江戸屋敷出入尼
江戸屋敷出入女
江戸屋敷出入男
江戸屋敷出入者
江戸屋敷出入人
江戸屋敷出入
江戸屋敷
江戸
江戸
江戸

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8　　ガラス使用

天明元辛丑年二月

依場所所出雲守手限ニ而見合ニ上注相
元極お洞集ハ変
同論見被見合ニ而

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8　　ガラス使用

十ヶ年今令弐百卅壱箇年、増弐千
弐百七拾壱箇年ニ当ル、其内
弐千弐百三拾壱箇年ハ通用ニ
増弐千弐百三拾壱箇年ニ而組合ニ
弐千弐百三拾壱箇年ハ通用ニ
改ル、右組合ハ用ニ割ハ
改ル、右割ハ

右之通ニ而ハ
前廉ニ申上候通
実ニ不都合ニ
而ハ候得共
附並ニ相違
附並ニ相違
実ニ当惑
附並ニ相違

九月

右之通相達候間可被

右之通令相達仍而執達如件

右之通令相達仍而執達如件

吟味及発相達仍而執達如件

右之通令相達仍而執達如件

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』 請求記号 814-8

ガラス使用

814

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用

814
特別
8

国立国会図書館　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『天明令典永鑑』　請求記号 814-8

ガラス使用